

比較から得たもの

東京大学大学院人文社会系研究科アジア研究専攻
蒋薰誼

顧みると、今までの人生は絶えずに北へ行く流れであった。島国である台湾において唯一の海なし県である南投が私の故郷である。南投は台湾の中心部にあり、知名な日月潭があるところである。ただ、観光地以外のところはあまり賑やかではなく、田舎のイメージが強い。私は南投県の小さな町、草屯で楽しい子供時代を過ごした。その後より優秀な学校に進学するために、中学と高校は台中の進学校に、大学は台北のエリート大学に進学した。益々北へ、益々都会へ。そして、現在は遙かに北にあるもう一つの島国におり、国際的な大都市の東京で暮らしている。

東京で初めて雪を見て、その感動は今でも忘れない。湿度が極めて低くなると、肌が乾燥すると同時に、いろいろな健康問題が起こることを痛感し、初めて加湿器を使った。太陽が午後四時半頃に沈んでしまう冬の夜の長さに驚いた。また、異世界の迷路のような複雑な鉄道交通路線を利用し、様々な国の方と出会うと、大都会に生きている実感が湧く。

私の研究対象である江戸儒学者の荻生徂徠は、父親が放逐されたため、田舎の南総で十代と二十代を過ごした。江戸に戻った二十代後半の徂徠は、その「南総体験」と目の前の繁華な江戸を対比し、人に対する「風俗」の影響力は莫大であり、そして人々は自分が生きている環境とそこからもらった経験しか分からないため、識見が制限され、まさに「くるわ」に囲まれたような状況にいることを悟った。そのため、徂徠は、「くるわ」から出て、現在の「風俗」を相対化する能力を強調した。

居所がずっと変動していた私は、徂徠が言った「風俗」の違い及び「くるわ」の制限を確実に感じている。様々な情報が自由かつ速やかに流通している現在でも、都会と田舎での暮らし方や人々の関心は違っている。そして、言うまでもなく、国の境を超えた後、文化・価値観などの違いは非常に大きいと感じる。

来日する前の私の日本に対する印象はごく単純、そしてシンプルなものばかりであった。例えば、「日本の食べ物は塩辛い」、「日本人は皆礼儀正しい」など、台湾人の日本への一般的なイメージを共有していた。これらの印象は間違っていないけれども、日本という国の複雑さを非常に乱暴な形で要約して至った結論だと思う。「食べ物は塩辛い」は恐らくラーメンやとんかつなどの食べ物に対するイメージだろう。しかし、実際の日本の家庭料理は台湾より遙かに薄味であり、伝統的な日本料理も濃厚な味を追求していないと思う。また、礼儀正しいことの反面、人間関係は一定の距離を取っており、建前と本音が弁別しにくい場合がよくあると実感している。また、来日して、日本で何年も生活して、日本の方々と付き合い、他者である日本を単純に理解してはいけなことが分かった。また、そこから、自己である台湾のいろいろな事象を、より深く理解できるようになった気がする。例えば、私は日本の方

から「台湾料理の特徴は何か」と聞かれて、初めてこの問題を考えた。ちなみに、その答えは「やはり甘い」だ。また、台湾では不作法な振る舞いがよく見られる。しかし、その反面にあるのは、人情味溢れる社会と「一致すること」を追求していない自由な雰囲気である。

ここで、私が心得たことは、自己と他者の文化を比較する目的は、決して両者の優劣を下すためではないということだ。それは、自己と他者の実態を十分に分かった上で、他者を理解するために自己の特徴を以て他者を思索し、自己を認識するために他者の特徴から自己を対照する作業だと思う。この作業を通じて、他者と自己を同時に「相対化」し、それぞれの「くるわ」から両者を解放することができる。以上は居所がよくかわる私にとって非常に有益な心得であり、私が従事する思想史の比較研究にも役に立つ視点である。